

# 夢や目標をもち ひたむきに生きる

伊勢市出身、プロ野球草創期の二人の名投手

## 沢村栄治と西村幸生



沢村投手

(写真提供：読売新聞社)

1934（昭和9）年、日米野球戦第10戦。9戦目まで、日米の実力の差は歴然で日本選抜は1勝もできず9戦全敗。しかし、この試合は違いました。マウンドに立っているのは、沢村栄治投手。快速球などが冴えわたり、全米軍は手も足も出ませんでした。初回あのベープ・ルース注1からも三振を奪い、終わってみれば9奪三振被安打5に抑え完投。試合はホームランによる1失点で日本選抜は惜敗でしたが、メジャー・リーガーたちが唯一“真剣”になった一戦でした。17歳の少年の右腕が見せた快挙に日本中が沸きました。

沢村投手が野球を始めたのは小学校に入学してすぐ。類い希なスピードとコントロールを身につけた沢村投手の名は、全国に知られてきました。京都商業学校へ進学した沢村投手の投球にはさらに磨きがかかりました。3回の甲子園出場を果たし、一試合25奪三振を記録するなど大投手の片鱗を見せました。

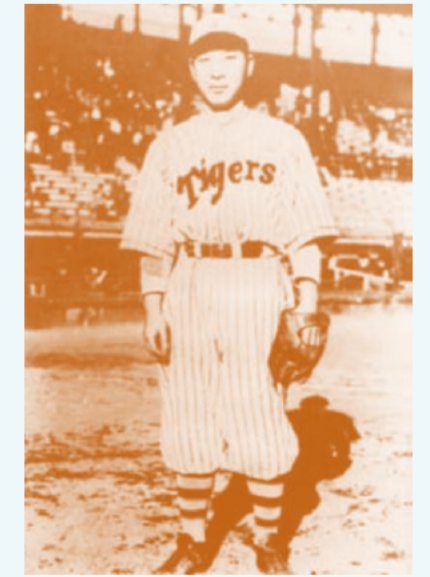
西村投手が通った厚生小学校と後に沢村投手が入学する明倫小学校は、ずば抜けて野球の強いチームでした。宇治山田中等学校進学と同時に野球部へ入部した西村投手は、すぐに頭角を現し強肩を見込まれて三塁手から投手に抜擢、大きく飛躍しました。エース西村を擁する宇治山田中等学校は県内の大会でことごとく優勝。卒業後は、愛知電気鉄道（現名鉄）を経て関西大学へ入学。エースとして主将としてチームを牽引し、関西大学黄金時代を築き、西村幸生の名を全国にとどろかせました。1937（昭和12）年、大阪タイガース（現阪神タイガース）に入団。すでに26歳になっていた西村投手は、東京巨人軍（現読売ジ

ヤンツ）の大投手として評判の高い同郷の沢村投手に対抗心を燃やしていきました。

プロ野球発足後の2年間、シーズン最後を飾る優勝決定戦はいつも東京巨人軍（現読売ジャイアンツ）と大阪タイガース（現阪神タイガース）の両チームで争われました。今なお、両チームの試合が「伝統の一戦」といわれるのはそのためです。その時期にエースとして両チームを背負っていたのが、宇治山田市（現伊勢市）出身の二人でした。

足を高く振り上げるフォームから生み出される剛速球などが武器の速球投手としてならした沢村投手のプロ野球での栄誉は計り知れません。5年間で63勝を挙げ三度のノーヒットノーラン（無安打無得点試合）を達成。また、プロ野球初代の最高殊勲選手（MVP）にも輝いています。一方、西村投手は、多彩な変化球と緩急自在の投球術。そして、天下一品のマウンド度胸が持ち味で、2年連続でチームを日本一に導き、3年間で通算55勝を挙げました。二人のドラマチックなライバルストーリーは、野球ファンを大いに魅了し、観客動員にもつながりました。

1937（昭和12）年、日中戦争が始まりました。戦争は、両投手の野球人生にも大きな影を落とすこととなります。1938（昭和13）年、沢村投手に一度目の召集がかかりました。2年後、兵役を終えてプロ野球に復帰するも、過酷な戦場で肩を壊し全盛期の剛速球は失われていました。しかし、球威は落ちながらも緩急を織り交ぜたピッチングに切り替え、三度目のノーヒットノーランを達成しています。1941（昭和16）年には太平洋戦争が始まり、シーズン終盤に沢村投手は二度目



西村投手

(写真提供：西村 隆明さん)

- 理想をもって前向きに生きる
- 郷土に対する誇りや愛着をもつ

の召集を受け戦地へ。再び復帰した時には、すでに彼の投手生命は絶たれていました。1943（昭和18）年7月6日宿命のライバル阪神戦。3回までに8つの四球と2本のヒットを許し、失点5。その後、二度とマウンドに戻る事はありませんでした。やがて三度目の召集。1944（昭和19）年12月、台湾沖で27歳の生涯を終えました。「必ず帰ってくる。帰ってきたら、いい父親になる。」これが、沢村投手の妻に残した最後の言葉です。

一方、3年間の現役生活に自らピリオドを打った西村投手は、1944（昭和19）年に召集。「すぐ帰る、心配するな。子供たちを頼む。」と家族に告げ、家を出たといひます。翌年フィリピンで果て、二度と妻子の元に帰ることはありませんでした。35歳でした。

戦争で命を落とした両投手は、故郷伊勢市で静かに眠っています。沢村投手の墓石の上ののっている野球ボールの正面には、彼が深く愛したジャイアンツの「G」、そして裏面には、背番号の「14」が刻まれています。また西村投手の墓には、タイガースのマークが入った線香台、バット型の花台が設置されています。

## 考えてみよう

- 1 1934（昭和9）年の日米野球戦第10戦の様子はどうでしたか。
- 2 野球を始めてからプロ野球選手となるまでの二人の活躍はどのようなものでしたか。
- 3 プロ野球選手となつてからの二人の活躍はどのようなものでしたか。
- 4 戦争は二人の野球人生にどのような影響をおよぼしましたか。
- 5 戦争で命を落とした沢村投手や西村投手が家族との別れに際して残した言葉を読んで、どのようなことを感じましたか。
- 6 あなたは、二人の生き方からどのようなことを学びましたか。
- 7 さまざまな分野で活躍した三重県出身の人物について調べ、それぞれの残した業績や生き方について考えてみよう。

## 沢村投手、西村投手の業績

### 沢村栄治

1917（大正6）年、伊勢市岩淵生まれ。明倫小学校から京都商業学校に進み、1936（昭和11）年にプロ野球が誕生すると、東京巨人軍（現読売ジャイアンツ）のエースとして活躍しました。足を高く振り上げるフォームから生み出される剛速球と「三段ドロップ」といわれた落ちるカーブで、チームをプロ野球最初の日本一へ導きました。1944（昭和19）年戦死。1947（昭和22）年には彼の功績をたたえ、最も活躍した投手に与えられる「沢村賞」が制定され、1959（昭和34）年には野球殿堂入りとなりました。



沢村投手の胸像  
（写真提供：伊勢市）

### 西村幸生

1910（明治43）年、伊勢市大世古生まれ。厚生小学校で野球を始め、宇治山田中等学校、関西大学で投手として活躍後、1937（昭和12）年26歳の時に大阪タイガース（現阪神タイガース）に入団。速球とカーブ、巧みに操るコントロールを武器に通算55勝を挙げ、「巨人キラー」と呼ばれるなどし、チームの二度の優勝に貢献しましたが、3年で退団。1945（昭和20）年戦死。1977（昭和52）年には、野球界に対する貢献が認められ野球殿堂入りとなりました。伊勢市の倉田山公園野球場には沢村投手とともに西村投手の胸像があります。



西村投手の胸像  
（写真提供：伊勢市）

- 注1) ベーブ・ルース：1895～1948 本名 George Herman Ruth アメリカのプロ野球選手。強打者として人気選手となり、1927（昭和2）年には年間60本塁打の大記録をつくる。通算714本の本塁打記録を残した。
- 注2) 野球殿堂：日本野球の発展に貢献した関係者、選手の功績を讃えるための制度及び博物館。1959（昭和34）年に創設された。